

想像力向上をねらいとした「おはなしづくり」の効果 —保育学専攻学生の事例研究より—

増原 真緒*

要約

保育者は表現力豊かに子どもとかかわりながらその発達を支えていく。子ども理解を深め、保育技術を豊かにするためには自身の想像力が欠かせない。本研究は保育学生の想像力の向上に着目し、「おはなしの想像」と題したお話作りを通して学生が自然と想像力を高めていけるよう取り組みを行ったものである。1枚の絵を見て学生がお話を作るという作業を継続的に行い、想像するという機会を多く持つ。また、それを学生同士で共有し、他者の想像に触れることで、一層自身の想像力を広げることができると仮定した取り組みである。お話作りに取り組む学生の様子は回数を重ねるごとに変化し、恥じらいや抵抗感を抱いていた者も次第に楽しんで取り組むことができるようになっていった。そして、本取り組みの前後にアンケートを実施し、意識調査を行うことで、学生自身の認識を調査した結果、半数以上の学生が本取り組みを通して自分自身への変化があったと回答している。課題も見つかったが、それを改善して継続的に実践していきたい取り組みとなった。

キーワード：想像力 表現力 保育者養成 言語表現 おはなしづくり

2018年10月1日受理（教育研究）

I はじめに

幼稚園教育要領および保育所保育指針では、絵本等に触れることについて「絵本や物語に親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」¹⁾と謳われている。保育者は保育現場において、子どもの豊かな想像力を育むため、子どもが絵本や紙芝居を中心とした児童文化財に触れる機会を設定するとともに、自身も想像力豊かに子どもとかかわりを持つことが大切である。なぜなら、保育者は子どもを導き、その成長を見守りながら時に子どもの援助者となり、小さな変化を捉え、多角的に想像しながらその思いに寄り添うことが求められているためである。多角的な視点を持ったかかわりを意識せず、保育者の一方的および主観的な決めつけで子どもを捉えることは非常に恐ろしいことである。したがって、子ども一人一人の変化を捉え、それに即したかかわりを持

つためには、目の前の子どもの思いやその姿に至るまでの背景に思いを巡らせ、多角的に想像する必要があるのだ。

また、保育現場においては日常的に、絵本や紙芝居のみならずパネルシアターやペープサートその他諸々の保育実技を子どもに向けて行う機会がある。絵本においてはその世界観を重要視し、自然な声色と表現で読み聞かせることが求められており、紙芝居をはじめとするその他の保育実技においては登場人物やキャラクターになりきって「演じる」ことで、見ている子どもが楽しめるような作りとなっており、絵本を中心としたこれらの児童文化財について近年では様々な研究が進められている。いずれにせよ、読み手・演じ手である保育者はストーリーを理解し、その内容や登場人物の思いに自分の思いを重ね合わせながら子どもたちの前に立つ必要がある。単に文

*大阪健康福祉短期大学
連絡先：増原 真緒
〒690-0823 島根県松江市西川津町 4280
大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科
E-mail: m-masuhara@scss.ac.jp

字を目で追い、声を発するのではなく、保育者が読み聞かせ方および演じ方を工夫することによって子どもはお話の世界に自分自身が入り込み、夢中になってその世界を疑似体験することができるのである。

上記の2点において、保育者を目指す学生の力は当然まだまだ未熟であり、それらの力を獲得するためにはいずれも豊かな想像力を養うことが必要となる。様々なことにおいて豊かに、また多角的な視点を持って想像することができなければ、子ども理解を深めることは難しく、保育実技においてもそのストーリーを理解することができ兼ねるためである。また、近藤(2015)は保育学生の保育表現技術習得について「保育実践において豊かな『言語力』が求められる今日、いかに伝えるかを考察できる保育者を養成していくことが課題」²⁾だと述べており、想像力を高めるだけでなく、想像した自分のイメージをより豊かな表現で他者に伝えることで相互的なコミュニケーションを図ることができるのだと示唆している。

本取り組み「おはなしの想像」から、学生自身が想像したものをクラスメイトと共有することで、他者の想像に触れること、そして1つのもの(こと)から自分とは異なる様々な捉え方が生まれることを体験することができるのではないかと期待を持った。

II 研究方法

本校2年次必修科目である「言語表現」(全8コマ:12時間)の授業において以下の取り組みを行う。

1. 対象者

島根総合福祉専門学校児童福祉科 平成29年度2年生(履修者20名)

2. 実施時期

2017年4月1日～8月30日(前期授業8コマ)

3. 内容の流れ

(1) 学生に対する質問紙によるアンケートの実施

初回授業の冒頭で、自身の想像力および表現力についてのアンケートを実施する。そこで学生の現状(心境、自己認識)をどのように捉えているのかを

把握する。授業全コマ終了後に同様のアンケートを実施し、受講前と後の変化について学生の認識を明らかにする。

(2) 「おはなしの想像」の実施

全8コマの授業のうち7コマにおいて、毎回冒頭で「おはなしの想像」と題したお話作りを行う。目に見える形にするものでなく頭の中でのイメージであっても、お話を創りあげ、文字にすることで形作っていると捉えられることから、「想像し、創造する」という2点が含まれると筆者は考えている。しかし、本授業と継続して後期開講科目で児童文化財の作成を予定しているため、今回はあえてイメージすることに重心を置き、「想像」という意味合いでの実施とする。

その具体的な取り組み内容としては、1枚の絵を見てイメージを膨らませ、自分なりのお話(物語)を作り文章化するというものである。1枚の絵は毎回A4用紙の上部分に印刷されたものを筆者が学生に配布し、下部分のスペースにお話を文字にして書き込んでいく。想像するための題材となる絵は、毎回学生全員が同じ絵を見て取り組むことで、同じ絵から様々な想像やお話が生まれることを実感できるようにする。

お話の作成後はグループ内で互いに発表を行い、感想を言い合う。グループは4人1組の5グループに分け、より多くのクラスメイトの想像作品に触れられるよう、毎回異なったメンバーで構成する。グループ内で発表を終えたら、推薦により1名を選出し、クラス全体に発表をする、という流れになっている。

(3) 「絵本ノート」の作成

前期の5ヵ月間で興味のある絵本を見つけて最低30冊読み、あらすじを書く作業を行う。それを各学生がファイルに綴じ、1冊の「絵本ノート」を作成する。これの大きな目的としては、保育者として現場に出るまでにより多くの絵本と出会い、その物語に触れつつ、保育実技の引き出しを増やしておくことだが、この取り組み自体も様々なお話に出会う機会となり、学生の想像力向上の支えになるのではな

いかと考えている。

Ⅲ「おはなしの想像」の概要

「おはなしの想像」を通して様々な場面やストーリーを想像する機会を多く持ち、その内容を他者に発信すること、また他者の発表を聞くことで互いの想像（イメージ）を共有および理解しようとし、認め合うことに繋げていきたいと考えた。

授業前に学生の心境（今の思い）を聞き取り、授業を通して、想像・表現し、それを共有して理解し合う経験を積むことで、授業を終えた後の学生の変化を明らかにしていく。

1. 事前アンケートの実施と学生の回答

(1) 事前アンケートの内容

（実施日：授業1回目 2017年4月10日）

質問は全部で13項目あり、質問Ⅰ～Ⅱを選択式、質問Ⅲ～Ⅳを自由記述とした。以下に質問内容と選択肢を記す。

Ⅰ「表現力」について

- ①文化財（絵本、紙芝居など）を用いて表現することが好き
- ②1人で歌ったり身体表現したりすることが得意な方だと思う
- ③誰かと一緒に歌ったり身体表現したりすることが好き
- ④演じること、役になりきることが楽しいと感じる
- ⑤自分の思いを言葉にして伝えることが得意だと思う
- ⑥自分が相手に話をする時に、内容が伝わらないと感じることはほとんど無い
- ⑦自分の思いを文章にして伝えることが得意だと思う
- ⑧絵本に親しんで育った方だと思う（読み聞かせてもらった、あるいは自分で絵本を見ることが好きだった）

Ⅱ「想像力」について

- ①人の話や物語を聞いて、その情景を頭の中でイ

メージできる

- ②よく色々なことを想像する
- ③想像力が豊かな方だと思う

Ⅲ 表現力豊かな保育者とはどのような人だと思いますか（自由記述）

Ⅳ 表現力の豊かさを向上させるためには、どのようにすると良いと思いますか（自由記述）

(2) 事前アンケートの回答内容

①学生自身の「表現力」および「想像力」に対する意識について（質問Ⅰ～Ⅱ）

質問Ⅰ～Ⅱでは、「1～5」の数字を選択する形にしており、「1：全くそう思わない、2：そう思わない、3：どちらとも言えない、4：そう思う、5：強くそう思う」という分け方になっている。

表1の結果から、「表現力」および「想像力」とも、選択数字の中心部分に人数が多く集まっているが、「全くそう思わない」や「そう思わない」という選択をしている者も3割から5割程度見られることから、自信を持つことができない学生の様子もうかがえる。

表1 質問Ⅰ～Ⅱに対する結果（人数と割合）

	1	2	3	4	5
①	1 (5%)	1 (5%)	6 (30%)	8 (40%)	4 (20%)
②	3 (15%)	5 (25%)	9 (45%)	3 (15%)	0 (0%)
③	0 (0%)	1 (5%)	4 (20%)	14 (70%)	1 (5%)
④	2 (10%)	4 (20%)	5 (25%)	8 (40%)	1 (5%)
⑤	1 (5%)	7 (35%)	9 (45%)	2 (10%)	1 (5%)
⑥	1 (5%)	9 (45%)	6 (30%)	4 (20%)	0 (0%)
⑦	5 (25%)	5 (25%)	7 (35%)	2 (10%)	1 (5%)
⑧	2 (10%)	5 (25%)	3 (15%)	4 (20%)	6 (30%)
①	1 (5%)	1 (5%)	6 (30%)	8 (40%)	4 (20%)
②	3 (15%)	5 (25%)	9 (45%)	3 (15%)	0 (0%)
③	2 (10%)	4 (20%)	5 (25%)	8 (40%)	1 (5%)

②表現力豊かな保育者のイメージについて（質問Ⅲ）

質問Ⅲでは「表現力豊かな保育者とは」と問いかけることで、回答者である学生が様々な保育者の姿を想像し、それを文字化することでイメージを具体的に持つことができるよう設定した。また、この質

問から学生がどのような保育者に魅力を感じ、目指したいと望んでいるのかを把握することができ、その目標に向かって意識を高めることができると考えた。できる限り具体的に記述するよう指示して回答してもらっており、その結果、以下のような回答が挙がってきた。

- ・喜怒哀楽などの感情を子どもに分かりやすく伝えることができる。
- ・自分の伝えたいことを何らかの方法（言葉、身ぶりなど）で伝えることができる。
- ・自分の思いを素直に表現できる。
- ・自分のイメージを言葉や歌、絵など何かしら他者に分かる形で表現することができ、伝える手段を知っている。
- ・明るくて子どもから好かれている。
- ・恥ずかしがることなく色々な体験を子どもに伝えたり一緒に楽しんだりできる。
- ・1つの物事から様々なことを思い浮かべ、実行することができる。
- ・表現する側としてだけでなく、受け手側としても感受性豊かで繊細に受け止める。
- ・身近なものに対して良く観察している。
- ・様々な経験をしている。

回答欄に複数の回答をしている者も多くおり、同一人物の回答であっても内容によって区別して記載したものもある。中でも多く回答が見られたのは、「言葉や歌などで表現することができる」、「自分の思いを相手に表現することができる（得意だ）」という内容であった。このことから、学生が「表現力」という言葉に対して、相手に分かりやすい形で発信するイメージを持っていることが分かった。

③表現力の豊かさを向上させるための方法について（質問Ⅳ）

質問Ⅳは、質問Ⅲの内容から関連して考え、保育者にとってどのような努力や経験が必要であるかということについてその認識を答えてもらった。学生からは以下のような回答が挙がってきた。

- ・他者とコミュニケーションをとること。
- ・色々な人の表現の仕方を見たり聴いたりして学ぶ。

- ・相手に伝える方法は1つではないと知り、捉え方を増やす。
- ・演劇や音楽など様々な芸術に触れる。
- ・絵本、手遊び、紙芝居、歌などに取り組む。
- ・様々な視点からものごとを見る。
- ・日々起こっていることや周囲の物事に興味を持つ。
- ・想像力を働かせる。
- ・恥を捨てて楽しむ。

回答については、質問Ⅲ同様に複数回答している者もいるため、内容によっては区別して記載している。以上の回答の中で「芸術に触れること」、「絵本や手遊びに取り組むこと」「様々な経験をする事」を挙げる者が多く見られた。筆者としては、様々な表現をするためには、まず想像することが重要なだと意識することで、より本研究における取り組みが効果的になるのではないかと考えていたが、あえてそれを伝えず、全授業を終えた時に学生が率直にどのように感じるのかに期待し、「おはなしの想像」の取り組みを開始した。

2. 「おはなしの想像」の実践

(1) 題材となる絵の選定

「おはなしの想像」は1枚の絵を見て、お話を作るという取り組みである。絵は、毎回筆者が選択したものであり、学生は取り組みの直前までどのような絵かを知ることはできない。毎回、授業の冒頭で配布された用紙に印刷された絵を見てイメージを膨らませ、約15分から20分程度の時間で自分の想像した物語を、印刷されている絵の下部分に文章化し、記していくという流れになっている。

題材となる絵は、絵本や紙芝居から選択することも検討したが、取り組む学生が2年生であるため、これまでにある程度保育実習や保育ボランティア等で現場経験を積んでおり、最低でも数冊の絵本や紙芝居に出会っていることが予想された。また、幼少期に見聞きしたことのある絵本等であれば、すでに話の内容を知っている学生がいる可能性が高い。その学生は原作を知っているために、元々の内容に引張られオリジナルの物語を考えることが難しくなるのではないかと懸念された。

そこで、近年出版されたものであり、短編の物語が集められた幼少期向けの本『考える力を伸ばす!心を育てる!読み聞かせ 366 話』(2015)の挿絵を活用することとした。本書は、世界各地の物語が集約されており、物語のジャンルも「日本の昔話、日本の名作、世界の童話、世界の昔話、世界の名作、神話、伝記」と様々である。また物語のタイプとしても、「ゆかいな話、しあわせな話、かなしい話、ぼうけんの話、かんだうする話、ほんとうの話、とんち話、ためになる話、ふしぎな話」と数多く集められている。物語の内容を学生に伝えはしないが、本書には各物語の内容をイメージさせる挿絵が数多く載っているため、それを活用することで学生は様々なタイプの物語を想像することができ、それが学生自身の想像の幅を広げることができるのではないかと考えた。本書の挿絵は 20 人のイラストレーターが描いており、様々な雰囲気を持つ絵に出会うことも活用を決定する 1 つのきっかけとなった。なお、366 話の中でどの絵を活用するかは筆者が吟味した上で選択したが、学生が自分の知っている物語を想像し、それに引っ張られてしまうことの無いよう、なるべく有名でない話の中から選ぶこととした。

学生に「おはなしの想像」用紙を配布するにあたって、絵をコピー用紙に印刷することについては、通常印刷から、PDF および JPEG 等での取り込みなど様々な方法を試した。本の印刷から学生の人数分コピーする手順の中で、どうしても印刷される色彩が薄くまたは濃くなったり、描かれた登場人物の表情がぼやけるなど不鮮明になったりと、どうしてもその挿絵自体が持つ雰囲気を壊してしまうことがあり、なるべくその事態を避けたいと考えたためである。その結果、「写真モード」での印刷をし、学生数が少人数でもあることから、製版機能でなく 1 枚ずつ印刷する形をとり、できる限り活用した本に載せられた絵に近い色合いの絵を印刷するよう工夫した。

「おはなしの想像」の取り組みは全 7 回を予定していたため、事前に 7 枚の絵を選択しておき、学生がお話を想像しやすいと思われる絵から順に取り組みすることとした。例えば、初回はキツネとブドウの木が描かれており、キツネは物欲しそうにその実ったブドウを見上げている、というものである。取り組

み中盤となる頃には、まげを結った侍のような風貌の男性が描かれているひょうきんな雰囲気のある絵を選択し、学生が新鮮な気持ちで臨むことができるようにした。最終回となる 7 回目には、きらきらとしたものが上から下へと描かれており、女の子がそれを両手で大切そうに包み込んでいるものにした。周囲が深い青色で、空や海、または宇宙など物語の背景を考えることで、女の子が手に持つものも幅広く考えることができると考えたためである。

(2) 学生の「おはなしの想像」への取り組みの様子

全 7 回に渡っての取り組みであったが、毎回様々なお話が考えられていたことから、流れに沿いながら抜粋して学生の様子について述べていく。

① 第 1 回取り組み

取り組みの第 1 回では、初めてお話をすること、それも 1 枚の絵から想像し、その場面のみでなく物語のように前後の流れも考えたお話を作るということに難しさを感じ、真剣な表情で絵にとらめっこをしたり、頭を抱えるような仕草を見せたりするなど戸惑ったような様子も見られた。すぐにペンを持って用紙に文字を書き始める学生も数人見られたが、多くの学生はイメージを膨らませて話の流れをまとめることに初めの数分を費やし、冒頭に 15 分程度で行うことを告げて取り組んだが、その時間内に書き上げることができた者は少なく、多くの学生が時間の延長を希望した。結果、20 分を過ぎたあたりで全員が書きあげることができた。

授業終了時に取り組みに苦戦していた学生らに口頭で尋ねてみたところ、1 枚のある瞬間(場面)が描かれた絵だけを見て、その絵から何をしているところなのかという様子をイメージすることはできるが、その前後の話を考えることに難しさを感じた者が多いようだった。

しかし、お話の内容としては、全体的によく考えられており、個性豊かなお話が多く見られた。前項でも述べたように、今回はキツネとブドウの木が描かれた絵を用いた。取り組み初回であるため、話の流れや起承転結のある物語を考えることは難しいのではないかと予想していたが、「あるところに～」、「ある日～」など時間の経過をただよわせる絵本の

ような始まり方を考えた学生が非常に多く、中にはキツネに「コン」、「ゴンキチ」、「きーちゃん」などと命名した学生も見られた。また、ある1名の学生はナレーションは無くキツネの気持ちを言葉にして並べ、詩のような文章を作成した。

全員がお話を作り終えたところでグループに分かれて発表を行った。お話作りが初めての学生も大勢おり、自分の作ったお話を他者に聞かせることに恥ずかしさや抵抗を感じた者も多く見られた。反面、聴き手側になると発表者の表情に注目して頬笑みを見せたり、目を閉じて聴き入ったりするような様子が見られていた。

②第2回取り組み

前回の実践では苦戦したもののクラスメイトとの発表を楽しい気持ちで終えられた者が多くおり、今回の取り組みにあたっては張り切って臨もうとする姿が見られた。今回は、森の中で葉の付いたハット帽子をかぶった男の子がたて笛で音色を響かせ、その周りで杖を持った男性とヤギのような動物が楽しそうに踊っている様子が描かれた絵を見て取り組んだ。お話作りの時間は、前回の取り組みと比べると悩む様子の学生は減り、全体的にすぐにペンを持って文字化し始め、15分で書きあげられない者もいたが、20分以内には全員が書き終えた。

学生が想像したお話の内容として印象的だったのは、1点目に主人公となる人物の命名をする者が増えていたことである。設定も細かく決められており、「羊飼いや「クラリネット吹き」、「一人ぼっち」、「貧しい暮らしをしている」など主人公の背景となる人物像や暮らしの部分まで考えられていた。2点目に主人公に設定する人物が学生によって様々であったことである。半数近い学生は、たて笛を吹く男の子を主人公に設定したが、残りの学生は絵の後ろ側に描かれている男性、またはヤギに焦点をあててお話を進めていた。

客観的な視点と言葉でストーリーを進める内容のものもあれば、主人公の視点に立ったストーリー展開のものもあり、学生の想像したものは前回と比べると幅広くなっていることが読み取れた。

③第3・4回取り組み

第3回は、片手に石のような塊を持った男性と、籠いっぱい野菜や肉を持つ女性が大きな鍋を囲み、楽しそうな表情を見せている絵で取り組んだ。描かれている2人の人物を夫婦と読み取る者もいれば、息子と母親、一人暮らしのおばあさんとその家に訪ねてくる若者、という設定など本日も幅広い視点での捉え方が見られた。中にはユニークな内容を考えた学生もおり、絵をテレビの画面に見立て、絵の中には描かれていない他者がテレビショッピングで買い物をするというストーリーだった。ユニークな想像である反面、子ども向けではない内容であったことが若干残念ではあるが、新しい視点でのお話に発表時にはクラスメイトから驚きの声があがり、大きな笑いに包まれるなど好評なお話であった。

第4回は、まげを結った侍のような風貌の男性が、火のついた暖炉の上にある大きな木の桶のようなものに入ろうとしている絵を見て取り組んだ。ひょうきんな雰囲気のある絵であり、前回ユニークなお話を考えた学生の影響もあってか、笑えるストーリーを考えた学生が多く見られた。

毎週、授業の冒頭で継続的にお話作りに取り組んでいることで、お話作りにかかる時間は全員が15分程度になってきていた。また、発表時の恥もなくなってきており、回数を重ねるにつれて学生の表情は柔らかくなり、リラックスした雰囲気の中で作成したお話を共有することができるようになってきた。

④第5・6回取り組み

第5回は、白髭を生やした男性とショールをかけたしわのある女性が降り積もる雪景色の中で女の子の形の雪だるまを作っている絵を見て取り組んだ。描かれた2人の人物の表情は悲しんでいるようにも、切ない笑顔を浮かべている表情にもとれるが、学生の多くが「貧しく寂しい老夫婦」や「子どものない夫婦」という背景を想像してお話作りに取り組んだ。寂しい暮らしの中で小さな喜びを感じるという内容のものも多く、発表時にはクラスメイトのお話を聴いて目をうるませる学生の姿も見られた。学生に感想を聞くと「設定は人によって様々だったが、描かれた人物の表情や絵の色合い、雰囲気から読み取る

背景は似たものを感じる人が多いのだな」という声や「悲しいお話が多かったが、作家でもないわたしたちから人を感動させるお話が生まれることもあるんだ」などの声が聞かれた。

第6回は、猫が魚をくわえてにんまりとした表情で走っている絵からお話作りを行った。猫の周囲には何も描かれておらず、お話の背景を考えるには頭をひねる必要があるような絵だったが、掛け軸に描かれているような色合いや雰囲気から「昔々～」で始まるお話を考えた学生が多く見られた。

これまで6回に渡って取り組んでおり、グループ内で推薦された者はクラスメイト全員の前で発表する形式をとっていた。事前に筆者より、「全7回の中で最低でも1回は発表をすること」と指示を出していたため、誰がまだ発表していないのかと声を掛け合い、確認する様子も見られていたが、全員が発表を経験済みであるグループでは推薦となるため、よく考えられたお話を作る学生がくり返し選ばれやすくなっていた。

⑤第7回取り組み

最終回となる本回では、きらきらとしたものが上から下に描かれており、女の子がそれを両手で大切に包み込んでいる様子が描かれた絵を見て取り組んだ。前述したように、この絵は描かれた女の子の周囲が深い青色で、空や海、または宇宙などの背景を考えられそうなものである。予想通り、学生は夜空や海と読み取った者が多かった中で、「真っ暗な穴の中」、「この世とあの世の狭間」、「夢の中」という設定をした者もあり、他の学生からは「そんな見方もできたのか」と驚きの声が聞かれた。

取り組みを始めた頃の絵と比べると、描いてあるものや人物が少なく、想像を膨らませられる幅が広がる反面、お話を作るためのヒントが少なく、難しさを感じた学生もいたことだろう。しかし、初回のように苦戦する学生の姿は見られず、むしろすぐさまペンを動かす様子がうかがえたことから、目で見たものから自分なりの想像力を働かせることが容易になりつつあるのではないかと考えられた。

3. 事後アンケートの実施と学生の回答

(1) 事後アンケートの内容

(実施日：授業8回目 2017年8月7日)

I 「表現力」について

事前アンケートと同じ内容で質問を行っているが、⑧の質問は変化のない質問であるため、行っていない。(Ⅲ. 「おはなしの想像」の概要 第1項(1)参照。)

II 「想像力」について

上記(I 「表現力」について) 同様、事前アンケートと同じ質問を行っている。

Ⅲ 授業を履修する前の自分と今の自分を比べて、その変化について

- ①人前で発表したり表現したりすることへの抵抗がなくなった
- ②人の話や物語を聞いて、その情景をイメージできるようになった
- ③イメージやアイディアを思い描くことができるようになった
- ④思い描いたイメージを表現することができるようになった

Ⅳ “Ⅲ”で以前と比べて一番変化を感じる項目を選び、なぜそのような変化が現れたのか、考えを述べて下さい(自由記述)

Ⅴ 「おはなしの想像」を通して、あなた自身への影響はどのようなことがありましたか(自由記述)

(2) 事前アンケートと事前事後アンケートの回答結果比較

事前アンケート同様に、質問I～Ⅲでは、「1～5」の数字を選択する形にしており、「1：全くそう思わない、2：そう思わない、3：どちらとも言えない、4：そう思う、5：強くそう思う」という分け方になっている。

①学生自身の「表現力」および「想像力」に対する意識について（質問Ⅰ～Ⅱ）

表2 質問Ⅰ～Ⅱに対する結果（人数と割合）

	1	2	3	4	5
①	0 (0%)	0 (0%)	4 (20%)	11 (55%)	5 (25%)
②	1 (5%)	4 (20%)	10 (50%)	4 (20%)	1 (5%)
③	0 (0%)	0 (0%)	5 (25%)	11 (55%)	4 (20%)
④	0 (0%)	1 (5%)	8 (40%)	8 (40%)	3 (15%)
⑤	1 (5%)	8 (40%)	6 (30%)	3 (15%)	2 (10%)
⑥	0 (0%)	6 (30%)	7 (35%)	7 (35%)	0 (0%)
⑦	5 (25%)	5 (25%)	6 (30%)	3 (15%)	1 (5%)
⑧	0 (0%)	2 (10%)	5 (25%)	9 (45%)	4 (20%)
⑨	0 (0%)	2 (10%)	5 (25%)	8 (40%)	5 (25%)
⑩	0 (0%)	4 (20%)	3 (15%)	9 (45%)	4 (20%)

上記の事後アンケート結果と事前アンケート結果を比較してみたいと思う。まず「表現力」についての学生の意識は、事前アンケートと比べると、文化財を用いたり身体表現をしたりすることに対して「好き」、「楽しい」、「得意」だと感じることができる学生が増えていることが分かった。また、質問⑤の「自分の思いを言葉にして伝えることが得意だと思う」という質問についても、少数ながら前向きな意識を持つことができる学生が増えている。一方、質問⑥「自分が相手に話をする時に、内容が伝わらないと感じることはほとんど無い」についてはあまり変化が見られないことから、他者とのコミュニケーションについては学びが薄かったことがうかがえ、今後の反省点として考えていかねばならない。

また、質問⑦「自分の思いを文章にして伝えることが得意だと思う」とについても事前アンケート結果とほぼ変わらない結果となっている。本取り組み「おはなしの想像」では学生の想像した内容を文章化する機会を継続的に持ったつもりではあったが、文章を書くこと自体が苦手な学生も多くいるため、苦手意識は克服できなかったのではないかと考えられる。文章を書くことの得手不得手については学童期からの国語を中心とした学習を通して身につけていくことが重要ではあると考えられるが、成長してからでもその力を向上させることはできる。保育者となった際には日々の保育書類や記録も日常業務としてあるため、出来る限り社会に出るまでに学生の苦手意識を取り払い、前向きに文章表現ができるような対

策が必要なのだと改めて考えさせられた。

次に「想像力」についての学生の意識について、事前アンケートと比較した結果、これについても少数ながら前向きな回答へと変化を見せている。大きな変化としては、質問①「人の話や物語を聞いて、その情景を頭の中でイメージできる」、質問②「よく色々なことを想像する」、質問③「想像力が豊かな方だと思う」という全ての項目において、「全くそう思わない」と回答した者がいなくなったことである。毎回の「おはなしの想像」を通して自分がお話を考えたり、クラスメイトの作ったお話を聴いたりする機会を重ねる中で、想像することが自然と身につけてきたのではないかと考えられる。本授業を通して、学生が想像することの楽しさや、自身の想像の幅が広がったと感じてくれているのならば幸いである。

②「授業履修前後の自分自身の変化（質問Ⅲ）」および「変化を感じた理由（質問Ⅳ）」について

選択式である質問Ⅲは、筆者の担当する科目「言語表現」履修前後における学生自身の変化について尋ねた内容となっている。以下がその結果である。

表3 質問Ⅲに対する結果（人数と割合）

	1	2	3	4	5
①	0 (0%)	2 (10%)	7 (35%)	7 (35%)	4 (20%)
②	0 (0%)	0 (0%)	6 (30%)	11 (55%)	3 (15%)
③	0 (0%)	1 (5%)	9 (45%)	8 (40%)	2 (10%)
④	0 (0%)	3 (15%)	9 (45%)	7 (35%)	1 (5%)

質問Ⅳの回答は記述式としており、自由に記入できるようになっている。その中で、学生 20 名中 14 名が「おはなしの想像」から影響を受けたと回答している。回答内容には以下のものが挙がっている。

- ・人前で発表することに抵抗を感じていたが、回数を重ねるうちに恥ずかしさより楽しさに変わっていった。
- ・「おはなしの想像」を通して人の発表を聴く際、絵を見て想像しながら聴くことができた。
- ・人の話や物語を聴いて、その情景をイメージすることができるようになった。
- ・皆が楽しそうに取り組む姿を見て一緒に参加することを楽しめた。

- ・様々な人の表現を見て、こうすればいいかな、こうしたらいいかも、とイメージを持ちやすくなった。
- ・自分の想像を言葉にしたり、他者に伝わるように表現したりすることは大変だったが、その方法を知ることによって自分に合った伝え方が分かった。
- ・発表しても茶化す人もおらず、自分の想像や表現が周りの人のおかげで自分らしくできるようになった。

回答内容はできる限り学生の言葉をそのまま記載しているが、下線部は数多く挙げた回答を組み合わせたものや、誤字脱字を解説できるよう筆者が修正した部分である。

質問Ⅲの結果から、「全くそう思わない」と選択した者はいなかったものの、約半数の学生が「そう思わない」または「どちらとも言えない」という選択をしており、自身の成長を実感できなかった学生も多くいることがうかがえる。しかし、質問Ⅳの回答からは、半数以上の学生が「おはなしの想像」に取り組んだことで何かしらの変化を感じており、その回答から想像力の広がりや表現の仕方など、筆者が目的としていた部分の成長を感じたことが分かる。

また、残りの6名のうち、変化を感じた理由として「おはなしの想像」以外の取り組みを挙げている学生もおり、授業内で行った児童文化財の作成や、「絵本ノート」の取り組みも挙がっていた。中には、具体的な理由が述べられることなく自身の成長や感想のみを記入していた学生もいたため、それらは本取り組みの結果としては含めていない。

③『おはなしの想像』の取り組みから自分自身への影響について（質問Ⅴ）

質問Ⅴも記述式となっており、「おはなしの想像」に着目した質問内容となっている。学生の回答には以下のものが挙げられている。

- ・色んな可能性を想像して「○○かもしれない」、「○○と見立てよう」などと思いながら作ることができた。
- ・ただ想像するだけでなく、イメージし、文章を書くために論理的にイメージすることを意識す

るようになった。

- ・限られた時間の中で自分の想像力と表現力を発揮する機会になった。
- ・短時間で、どれだけアイディアを出してイメージをふくらませるかという作業の勉強にもなった。
- ・イメージする機会が多くあり、前に比べてイメージをふくらませることができるようになった。
- ・最初はありきたりな話ばかりだったが、後半からファンタジーやSF系の話を作れるようになった。
- ・自分で物語を想像して書き、読むことで想像力が豊かになったと感じる。
- ・どうしたら楽しんでもらえるのか、目の前の事だけではなく、向こう側を考えるようになった。
- ・グループに分かれ、他者のお話を聞いて、自分と違った視点だなと感じた。
- ・他者の作ったお話から、視点を換えることで自分には何も気にならなかったものが、他の人には重要に見えることがわかった。
- ・他者の作品を聞いている時間がとても心地よかった。色々な発想があつて面白く、素敵だと感じられた。
- ・皆の捉える視点が色々で新鮮で面白かった。それを聞くことや自分で想像してみることで、少しは考え等の幅が広がったと感じる。
- ・その人の持つ心の世界に触れられたようで、他者への親しみが増した。
- ・絵本の面白さ、奥深さを考えるようになった。1枚の絵の可能性は無限大だと思う。
- ・1つの絵に対して決まったイメージしか持っていなかったことが分かった。色々な見方ができるようになりたいと感じた。

回答内容は質問Ⅳ同様、できる限り学生の言葉をそのまま記載しているが、下線部は数多く挙げた回答を組み合わせたものや、誤字脱字を解説できるよう筆者が修正した部分である。

学生の回答を見ると、大きく分けて、自分自身がお話作りをしたことからの影響と、他者の想像および表現に触れたことからの影響が挙げられていること

が分かる。同様の回答はより具体的なものを代表して記載しているが、全体的に、他者のお話に触れたことの影響や喜びが多く挙がっており、そこから、自分ももっと面白いお話を作ろうという意欲となり、それが一層想像力を向上させることへと繋がったことが読み取れた。

20名中2名は「他者のお話を聴くことは面白いと思ったが、自分の成長に繋がるような影響は受けなかったように思う」、「発表して終わりにせず、自分達で絵本を作るなどがしたかった」という回答も挙がっている。前述したとおり、本科目を終え、後期には別科目の中で今回作ったお話を持ち寄って大型絵本作りをする予定になっているため、本科目では取り組んでいない。

IV 「おはなしの想像」取り組みの考察と課題

これまでに述べた学生の取り組みの様子とアンケート結果より、今回実践した「おはなしの想像」から、半数以上の学生が想像の幅を広げ、他者に向けて表現することについて影響を受けたと前向きに捉えている。筆者自身、7回に渡っての取り組みの様子を見る中で、学生が次第に楽しそうな表情で意欲的に取り組み、確実に想像の幅を広げて取り組んでいたと感じている。

同時期に課題として出していた「絵本ノート」の作成は、学生からその影響について1名を除いて回答欄に挙がることはなかったが、事後アンケートの質問Vの中で、絵本の面白さや奥深さを考えるようになったと回答する学生も存在していることから、お話作りと同時期に取り組んだことでクラスメイトの表現に触れるだけでなく、絵本作家の思いや心打たれる絵に出会い、それらも学生の更なる想像力へと繋がっていったのではないかと考えられる。

保育現場に出れば、日々子どもとかかわる中でコミュニケーションや子ども理解、保育技術に必要な想像力および表現力はもちろんのこと、誕生会や季節の節目には子どもたちを楽しませることができるよう出し物や演出を考え、実践しなくてはならない。また、様々なアイデアを絞り出し、子どもたちが主体的に活動できるような保育活動を工夫する必要がある。それら全てにおいて、どうすれ

ば子どものためになるか、楽しんで参加できるか、などと想像力を駆使し、実際に表現していくのである。

本科目の授業全8コマ終了時に、表現力豊かな保育者となるための土台として、必ず想像力が重要になってくることを学生に伝えた。「上手く表現しよう(したい)」と思いがちな学生は多いが、そのためにはどうすれば分かりやすく、あるいは楽しく、豊かに伝えられるのか、多角的な視点を持って想像することで自然と表現へと繋がっていくのである。「子どもに良いかわりをしよう」と思えば、まずは「目の前の子どもの立場に立って考えてみること」、「子どもが楽しめる表現方法を身につけたい」と思えば「自分が子どもならどのような保育者を『おもしろい』と思うだろうか」など相手の立場、または自分とは違った立場に立つことで自然と多角的な視点を持つことができるようになっていく。

「おはなしの想像」は子どもでも実践できる単純な取り組みではあるが、今後社会に出て子どもとかかわっていく学生だからこそ、楽しみながら自然と影響を受け、成長していった欲しいと筆者は考えた。幸い、学生のほとんどが楽しんで取り組む中でそれぞれに影響や成長を感じられたことが結果として分かり、本取り組みを継続することの価値を見出すことができた。学生自身が想像する機会を持つこと、そして他者の表現に触れ、相互的なかわりの中で認め合うこと、それらを経験することのできる「おはなしの想像」の取り組みを今後も継続していきたいと考える。

最後に、今回の取り組みから見えた課題の1つに、全7回のお話作りという時間を繰り返す中で、同じ作業が繰り返されることから学生の中には新鮮な気持ちを持ってしまう者もいたことが挙げられる。お話作りは経験として単発的に行うのではなく、今回のように継続的に行うことで学生の影響へと繋がったことが結果として表れており、重要点であるが、取り組みがマンネリ化してしまうことについては工夫が必要だと感じた。そこで、次回の取り組みにおいては、継続的に行う中で、1枚の絵という教材だけでなく、題材を変化させることも視野に入れて実践していきたいと考えている。

引用文献

- 1) 文部科学省他 (2018) 『幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領』 チャイルド本社 p.20.48
- 2) 近藤 千草 (2015) 『言語表現技術』における保育教材製作を通じた学びの広がり』『川村学園女子大学研究紀要』第26巻 第2号 1項-12項 p.2

参考文献

1. 岩田 栄作 (2012) 「おはなしレストランの取組—読み聞かせによる人間力の育成—」『国語教育論業』第21号 島根大学教育学部国文学会
2. 青木 逸美他 (2015) 『考える力を伸ばす!心を育てる! 読み聞かせ 366話』申請出版社
3. 小笠原 大輔 (2015) 保育者養成における身体表現教材

「おもしろダンス」に関する実践報告

4. 清道 亜都子 (2013) 「保育者養成課程学生における言語表現の現状と課題—『保育内容演習 (言葉)』の授業アンケートをもとにして—」『名古屋女子大学紀要』第59号 (人文・社会編)
5. 鈴木 律子 (2016) 「保育者志望の学生の想像力に関する一考察 —○△□の形を使って—」『浦和大学短期大学部 浦和論業』第55号
6. 中澤 潤ら (2005) 「絵本の絵が幼児の物語理解・想像力に及ぼす影響」『千葉大学教育学部研究紀要』第53巻 193~202項
7. 松田 ほなみ (2008) 「紙芝居製作からユニバーサルデザインへの発展—保育者の想像力を高める教材研究を目指して—」『名古屋女子大学紀要』第54号 (人文・社会編)

Effects of Storytelling on the Improvement of the Imagination —A Case Study of Students Studying Early Childhood Care and Education—

Mao Masuhara*

Abstract

Childcare providers support the development of children by associating with them through rich expression. It is essential for them to have an imaginative ability to understand children and learn childcare techniques. This research aimed to stimulate the imagination of students majoring in early childhood care and education by asking them to create a story titled “Imagining a Story.” They had an opportunity to develop imagination skills by making an original story after seeing a picture repeatedly. They were also expected to enhance imagination by sharing these stories with each other. They were at first hesitant to make an original story but gradually became accustomed to it after doing it several times. I also conducted a questionnaire survey on them before and after this program in order to evaluate their attitudes, showing that more than half of the students were themselves changed through the activities of this storytelling. These findings show that we should continue to ask students to create original stories for enhancing their imagination.

Key words: imaginative power, expressiveness, training of childcare providers, linguistic expression, storytelling

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address : Mao Masuhara
〒690-0823 4280 Nishikawatsu-cho, Matsue, Shimane Prefecture
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Child Care and Education
E-mail : m-masuhara@scss.ac.jp